

カンボジア研修報告

前田 志津子 山本 幸穂 太田 茜

Study report in kingdom of Cambodia

Shizuko MAEDA, Yukiho YAMAMOTO, Akane OOTA

Abstract

I often visited Cambodia until now since several years ago to support the education of children in Cambodia, and to promote interchange with the teachers, students and graduates of Royal Phnom Penh University. This time, I was able to visit hospitals in Phnom Penh and its suburbs together with two students of nursing Department of Kwassui woman's university. And we visited an elementary school, and Royal Phnom Penh University. This paper is the report of our visiting.

1. はじめに

筆者（第一著者）は、カンボジアに関してこれまでに2本の論文を発表してきた。すなわち、「カンボジアの子ども達の生活意識調査－コック・ブラック小学校の場合－」（2013）と「カンボジアの子ども達の生活意識についての研究－村の小学校と都会の小学校の子ども達の比較－」（2014）である。今回、極めて短期間ではあるが、カンボジアの医療に興味・関心をもつ看護学部の二人の学生と同国を訪問し、小学校、大学、病院を視察する機会を得た。本稿は、その研修報告である。

1-1 カンボジアの教育の現状と課題

まず、カンボジアの教育の現状と課題について述べてみたい。カンボジアは、日本と同じく満6歳から小学校へ入学する。義務教育は、小学校6年間、中学校3年間の計9年間となっている。子ども達が義務教育を無償で受ける権利は、カンボジア王国憲法で保障されている。しかし、現実には入学しても家が貧しく手伝いをしなければならなかったり、親が教育の大切さをあまり理解していないために留年したり、中途退学する子どもも少なくない。

就学率をみると小学校69%、中学校17%、高等学校約10%、大学0.7~1.0%と推定されている（2013年3月外務省の更新情報より）。

2012年12月佐賀大学で行われた日・越・カ国際人財育成シンポジウムでのプノンペン大学日本語学科の学科長ロイ・レスミー先生の説明によると、課題として次のことが挙げられている。①小学校在学中での中途退学があること。②教育に対する保護者の理解が低いこと。③地方と都会では教育の質に大きな差があること。④学校の授業スタイルや教師の考え方がマンネリ化していること。⑤大学への進学では、理系や工学系を希望する学生が少ないこと。⑥学生達は、複数の大学に籍をおく傾向があり、勉強する時間が十分取れないこと。⑦大学での授業は講義中心で、実験や実習のような授業が少ないこと。

そして、それらの課題の解決には、次のようなことが必要だと提案された。①保護者は、子どもを中学校卒業までは必ず行かせるように努めること。②特に地方に住む保護者に、学校教育を受け

ることの大切さについて理解させること。③地方と都会での教育の質の差をなくすために学生達に一生懸命指導すること。④学校の授業方法や教師の考え方を改善すること。⑤学生が理系、工学系に興味をもてるように高校で指導すること。⑦大学は、実験や研究を取り入れた授業の工夫をすること。⑧大学は、教員として専門性をもった人材を確保すること。

1-2カンボジアの幼児教育に関して

幼児教育の現状を把握するために、筆者は2012年12月王立の幼稚園教諭の養成校であるPre-School Teacher Training Centerを訪問した。そこで校長のプラク・ソリダ (Prak Solida) 先生より次のような話を伺った。1987年から2012年までの卒業生は、2,457名である。2004年から9クラスになり、現在学生数は400名である。

幼稚園教諭の養成校は、カンボジアではここ一ヶ所である。養成校では、子どもに対する教師としての質を高めることが求められている。そのための内容は、教育省から指示され、次の3点が重視されている。①子ども達にしっかりしつけを行うこと。②養成校を卒業した後は各地の幼稚園に勤務すること。③子どもの問題に関して、その解決のために研修をすること。また、養成するトレーニングについては次の6点①安全教育、②指導案の作成、③教材の制作、④ダンスの授業（私が訪問した時は、カンボジアの伝統舞踊であるアプサラダンスの練習が行われていた）、⑤教育実習、これは1年生で6週間、2年生で8週間プノンペン市内の幼稚園で実施される。⑥調査研究、2年生はレポートがある。例えば、「音楽は幼児のためにどのような効果があるのかについて」や「子どもの心理について」等。

養成校に併設されている幼稚園の園児数158名である。その中には、貧しい家庭の子ども達が70～80名いる。貧しい子ども達の中の30名はイーファEFA (Education For All) の支援を受け、昼食、午睡をすること。また3ヶ月に一度は健康チェックを受けているとの説明を受けた。(EFAは、今なお世界中に「読み・書き・計算」といった基礎教育を受けられない立場にある人々のために日本を含む各国政府機関NGO等も積極的に協力している。)

幼稚園の入園に関しては、保護者が希望すればだれでも入園できる。幼稚園の教材費は、1ヶ月2.5ドルである。

保育所に関しては、幼い難民を考える会Caring for Young Refugees (CYR) の活動がある。この活動は難民キャンプから始まりカンダル州とプノンペン郊外へ、そしてカンボジア全土へと展開している。1991年から幼児教育の支援を行い、10年間にカンダル州に6ヶ所の保育所がつけられている。



写真1 養成校の授業



写真2 伝統的ダンスの授業



写真3 養成校の寮



写真4 養成校併設の幼稚園



写真5 幼稚園入口ホール



写真6 先生の話聞く子ども達



写真7 学生達が見守る中子ども達にカブラを伝える筆者。左端は通訳のリホーさん



写真8 園庭ブランコの子ども達

1-3 カンボジアの医療に関して

医療に関して、上田広美・岡田知子編著『カンボジアを知るための62章』（2012）では、次のように述べられている。「医療機関は、欧米人、タイ人医師による病院が複数箇所あり、日本人が対応してくれるし、日本人クリニック、日本人歯科医師等もあり、在留邦人を取り巻く医療は向上している。病院や医師により医療費は異なるが、外国人向けの医療費は高額となることが多い」。プノンペン市内にある病院SOSは、高額の医療費がかかるそうだが、信頼できる病院であると私は現地で聞いたことがある。日本企業のカンボジア進出が進み日本人が生活しやすい環境も整いつつあるようだ。

私の友人のダニーさんは、「ジャパンハート」のカンボジアスタッフとして働いている、彼女は医療が専門ではないが手術に立ち会ったり、子ども達へ衛生習慣の指導にかかわったりしている。

「ジャパンハート」は2004年国際医療ボランティア団体として設立され、日本発祥のNGOで「医療の届かないところに医療を届ける」を理念に、医療が届かない地域でひとつでも多くの「いのち」をつなぎ止めている。

また、NGO日本国際医療開発機構の理事長北原茂実先生がプノンペンの地に北原病院建設予定であるという情報を今回の出発直前いただいた。現地で北原病院について尋ねると脳神経外科の専門病院で2014年11月に建設に向けてのセレモニーが行われたそうである。また、病院スタッフの日本語教育に関して、以前共同研究をしたカンボジア日本人材開発センター（CJCC）ボイ・ソムニアンさんが担当しているとのことである。

今回、看護学部の山本幸穂さん、太田茜さんとともに、カンボジアを訪問した。このことにより医療の一端については報告できることになる。

2. 研修日程

次の表は、今回の研修経過を時系列的に示したものである。実質5日間という短い研修ではあったが、小学校、大学、病院などいろいろな所を訪問し、カンボジアの今を肌で感じる事ができた。また多くの人々との出会いもあった。

研修日程 2014年12月25日（木曜日）－12月30日（火曜日）6日間

日次	月 日 曜日	現地時間	移動	活動内容
1	12月25日 (木曜日)	10:30	VN351	○福岡空港を出発。
		13:55 13:55	VN920	○ヴェトナムのホーチミン国際空港に到着。 ○同上空港を出発。（トランスファー）
		17:00	車	○プノンベン国際空港に到着。 ・入国審査。 ・健康チェック。 ○出迎えを受ける。 ・運転手のノウさん。 ・プノンベンの日本料理店EAT & SMILEでアシスタント・マネージャーをしているスキラさん。 横山正幸先生（福岡教育大学名誉教授・カンボジアの子ども達の教育を支援する会代表）夫人のあづま先生。 ○空港からグリーンパレスホテルに移動中、バスの中で横山先生より最近のプノンベンについて簡単なレクチャーを受ける。 ○ホテルに着き、チェック・インをする。 その後、ホテル近くのレストラン「クメールスリン」で夕食。この時スキラさんに病院を視察したいので、受け入れてくれる病院を探してほしいと依頼する。
2	12月26日 (金曜日)	08:40 09:30	車	○ホテルを出発。 ○コック・ブラック小学校に到着。6年生の子ども達と交流。 ・前田は2015年カレンダーの日本の四季を見せながら日本の風景について説明する。 ・カンボジアの歌「ア・ラピア」をみんなで歌う。 ・「ア・ラピア」をリコーダーで演奏して聞かせる。 ・子ども達はハーモニカで「キラキラ星」を演奏する。
		11:30		○コック・ブラック小学校を出発する。 ・小学校の近くの村のレストランで昼食をとる。
		14:00		○KEAN SVAYの町のヘルス・センター「PHOM THOM HEALTH CENTER」に到着。 ・同上のヘルスセンターはコック・ブラック小学校の先生から紹介していただいた。 ・所長ソーメイ氏を訪ね、施設を見学、スタッフの構成や運営などについて説明を聞く。 ・詳細については、81ページ参照。
		15:05 15:45		○ヘルス・センターを出発する。 ○ホテルに戻る。 ・ホテルで休憩。
		18:30		○ホテルのレストランで食事会。参加者は次のとおりである。 ・横山正幸先生と夫人のあづま先生。 ・ソケッチさん（王立プノンベン大学日本語学科卒業生で、現在プノンベンの三井商事に勤務）。 ・ラクスメイさん（王立プノンベン大学日本語学科卒業生で、現在プノンベンの株式会社FORVAL勤務）。 ・ソムニアンさん（王立プノンベン大学日本語学科卒業生で、現在カンボジア日本人材開発センター勤務）。 ・ホーンさん（イオンモール・カンボジア店の人事部長）。 ・山本さん、太田さん、前田の9名。それぞれの近況などを話し、交流する。

3	12月27日 (土)	07:40 08:20 10:40 11:10 11:45 11:55 13:00 13:15 13:35 13:45 16:45 18:30 21:10		<p>○ホテルを出発。</p> <p>○王立プノンペン大学に到着。 ・王立プノンペン大学日本語学科の第4回運動会を見学。 ここで以下のような様々な若者達と出会う。</p> <p>①日本・カンボジア絆増進事業の一環として1週間の予定でプノンペンに来ているという名古屋大学・四国大学・同志社大学のサークルの学生達、彼らは以前からの知り合いのように日本語学科の学生の中にとけ込み、運動会に参加していた。</p> <p>②タイのタマサート大学に留学中のF.Aさん。</p> <p>③一昨年日本語弁論大会で優秀賞を受賞し、その後佐賀大学に1年間留学したソビアラさん。</p> <p>④幼児教育に関して現在卒業論文を作成しているという日本語学科の学生チャリアーさん。</p> <p>⑤早稲田大学の法科大学院を修了して司法試験に合格したばかりという若き弁護士のY.Mさん、I.Sさん、Y.Hさん、彼らは2015年の9月までカンボジアに滞在し、その体験を将来に役立てたいとのこと、中古の自転車を買ってプノンペン市内を走り回っていると。</p> <p>○王立プノンペン大学を出発。</p> <p>○ツールスレーン博物館に到着。山本さん、太田さんの二人の学生はボル・ポト時代に虐殺が行われた刑務所跡「ツールスレーン博物館」を見学。</p> <p>○同上を出発。 ・ホテルに戻る。</p> <p>○ホテルを出発。 ・ダニーさん（王立プノンペン大学日本語学科卒業生、医療支援のNGO「ジャパンハート」に勤務）の結婚式に出席するため、タケオ州のダニーさんの自宅へ向かう。 ・途中、リホーさん宅に寄り、彼女をピックアップ。 ・王立プノンペン大学日本語学科の学科長レスミー先生宅に寄り、彼女をピックアップ。 ・レスミー先生宅を出発。</p> <p>○ダニーさん宅に到着。 ・新郎新婦の両親が会場の入り口で迎えてくれる。結婚披露宴は、ダニーさんの自宅の庭で開かれた。招待客はおよそ500人。ダニーさんの夫は、同じ職場で働いていた日本人。</p> <p>○ダニーさん宅を出発。 ○プノンペンのホテルに戻る。 ・日本語学科の卒業生ソパリカさんがお兄さんとホテルに來訪。彼女は、2013年12月に佐賀大学に短期の交換留学生として來日したことがある。</p>
4	12月28日 (日曜日)	09:00 09:50 10:15 12:15 12:30		<p>○ホテルを出発。</p> <p>○「こども病院」に着く。この病院は、日本など各国の援助によって、建設、運営されている病院である。</p> <p>・リーチャイ先生が約2時間にわたって病棟、施設を案内、説明してくださる。スキラさんが通訳をしてくれる。こども病院とのつながりは、スキラさんのお姉さんの病気が同病院で治り、その後もスキラさんのお母さんが病院に対して今なお感謝し、かかわりがあるとのこと。 こども病院視察の詳細は 82ページ参照。</p> <p>○こども病院を出発。</p> <p>○レストランROMDENGに着く。ここでは、チャンシーさんと彼女の夫チェンダーさんに会い、昼食を共にする。</p>

5	12月29日 (月曜日)	14:00	車	・チェンダーさんは、九州大学に留学し博士課程（後期）を2013年3月に修了、現在プノンペンで日本企業の社員として働いている。
		14:10		・チャンシーさんは、イオンの設立準備の段階から同社の社員として、重要な役割を果たしてきた女性である。
		14:45		○同上を出発。
		15:00		・ホテルに戻る。ホテルには、ネアリーさんと彼女の生後2ヶ月の赤ちゃんハナちゃん（女の子）、そしてネアリーさんのお母さんが来訪。しばらく懇談する。
		16:50		○ホテルを出発。
		18:00		・王宮に着く。王宮、王宮内の寺院と国立博物館を見学する。その後、川沿いのマーケットに寄る。
		19:00		・トゥクトゥクに乗り、ホテルに向かう。
		20:40		○ホテルに着く。ホテルまでの料金は、因みに4人で3ドル。
		09:10		・ホテル近くのレストランに行き、夕食。
		10:00		・ホテルに戻る。
		11:30		○チェック・アウトをし、ホテルを出発。
		13:00		○コック・ブラック・クローム小学校に着く。
14:00	・クメール語の授業をしていた6年生30名の教室を訪問。学校は7:00~11:00、13:00~17:00の2部制。子ども達とカンボジアの歌「ア・ラピア」を歌う。また、コマ回しや風揚げをして一緒に遊ぶ。1年生の子ども達とは紙風船をして遊ぶ。子ども達はとても喜ぶ。			
14:05	・職員室で先生方と懇談。			
14:20	○コック・ブラック・クローム小学校を出発。			
14:45	○王立プノンペン大学前の軽食レストラン「ハローハロー」に着き、そこで昼食をとる。ここでコンティアさんに会う。彼女は、王立プノンペン大学日本語学科の卒業生で、日本の化粧品会社に就職し、この1年間岡山に住んでいて、27日に帰国したばかりである。			
18:00	・レストランを出発。			
19:15	・CJCC（王立プノンペン大学のキャンパス内にある「カンボジア日本人材開発センター」）に寄る。レスミー先生から「さくらプロジェクト」の冊子を受け取る。			
20:10	・CJCCの掲示板にはJapanese Universities Informationのスペースが確保されている。			
22:00	○CJCCを出発。			
6	12月30日 (火曜日)	01:30	VN920	○プノンペン国際空港に着く。
		07:10		・ソパリカさんとお母さんや親戚の人が見送りにきてくれる。
				○プノンペン国際空港を出発（30分遅れ）。
				○ラオスのビエンチャン国際空港に到着。
				○同上出発。（トランジット）
				○ヴェトナムのハノイ国際空港に到着。
	○同上出発。（トランスファー）			
	○福岡空港国際線ターミナルに到着。			



写真9 クメール語の授業



写真10 紙風船突きを喜ぶ子ども達



写真11 凧揚げを喜ぶ子ども達

3. 活動報告

以下、現地での医療機関視察について、報告する

3-1 PHOM THOM HEALTH CENTERの視察から

PHOMは、村という意味、THOMは、大きいという意味だそうだが、筆者らは2014年12月26日カンダル州キエンス・ヴァイKEAN SVAYにある診療施設PHOM THOM HEALTH CENTERを訪問した。ここは公立の診療所で診察時間は決められておらず、いつでも診てもらえるようになっている。スタッフは、医師10名、看護師6名と聞く。来院する患者は、風邪や下痢、発熱、呼吸器疾患の診察・治療、妊婦の診察・出産、採血、予防接種など。また、教育面では、避妊についての指導を行っているという。

1日に来院する患者数は30人前後。料金は3日間の診療と薬で2000リエル（50セント）である。出産費用は5万リエル（12.5ドル）。看護師の仕事内容は、日本と同じく診療の補助である。記録を書いたり、包帯、消毒、注射を行ったりしているようだ。医療機器は血圧計と簡単なもののみで、X線などの大きな機器は何もない。

日本と大きく違う点は、入院する患者は食事を自分で準備しなければならないことである。しかし、患者が自分で準備することは考えられない、おそらく家族が届けることになるのではないかと思う。

重病者が来院した場合は、大きな病院を紹介し搬送するそうだ。そのためであろうか救急車は診療所の敷地に駐車していた。薬剤の保管場所や注射器の保管場所は施錠されていた。ベッド数は2床、一般入院時用、出産時用である。入院する部屋は個室になっているため、一応プライバシーに配慮されている。しかし、病院の環境状況は決して良いとは言えず、スタッフの衛生意識も低いように思われた。そのため、感染への心配が考えられる。また、医療器具が揃っておらず、大きな病気、怪我でなくとも対応することは困難ではないかと思った。しかし、地域住民にとっては身近にある公的な機関で、経済的でもあり、なくてはならない役割を果たしているものと思われる。



写真12 診療所入口



写真13 常備されている救急車



写真14 病室のベッド



写真15 分娩室の様子



写真16 注射器の保管

写真17 スタッフの医師と看護師
と報告者

3-2 NATIONAL REDIATRIC HOSPITALの視察から

NATIONAL REDIATRIC HOSPITALは、子どものための病院である。このこども病院は15歳までの子どもを対象としている。

まず、印象に残ったことは、この病院が様々な国の支援で創立されたということである。韓国、中国、日本……各国からの資金援助だけではなく、建物や医療機器の援助も受けているとのことであった。韓国は、将来もっと大きな病院にする計画をもっているとも聞いた。血液検査の建物は、古く、天井から雨漏りがするような状態だったが、近々改築予定との説明を受けた。構内の一角に日本から支援されたという「キッチン棟」があった。ここでは入院患者のために食事3食が用意されているという。

カンボジアの病院は、多くが営利中心に運営されており、一部の裕福な人しか利用できないということを知っていた。しかし、こども病院では貧しい人は無料で診察を受けられるということである。病院の玄関から直ぐのフロアには、ベッドが8床置いてあり、母親に付き添われて小さな子どもが休んでいた。カーテンの仕切もないオープンスペースである。プライバシーへの配慮が気になるところであった。一時、このスペースには30名~40名も入院していたという。できるだけ多くの子ども達への対応が優先されるのであろう。また、病院は24時間開いているということであったが、スタッフが足りておらず、患者の症状が急変したり、救急患者への対応のために非番の医師を呼ぶケースがよくあるということであった。これでは、緊急を要する患者が搬送された際、処置が遅れ、最善の処置が困難になるのではないかと思われた。

日本では病棟やリハビリ室など、それぞれの職種が連携しながら患者の回復援助を行っていくが、こども病院では手術から術後のリハビリまでひとつの病棟で実施している。理学療法士などがいないため、医師がリハビリまで行っている状況であった。

カンボジアの子どもたちのために複数の国が協力するという国際協力を間近で目にする事ができた。またこども病院は、カンボジアの方々にとってなくてはならない大切な医療施設だということを実感することができた。

課題としては、こども病院では、予防接種を行っているが、多くの方が予防接種のことについて知らず、予防接種を受けていないために罹患する患者も少なくないということであった。今後、より多くの方が予防の必要性をしっかりと理解し、感染防止のために予防接種を積極的に受けるようになることが望まれる。

視察をとおして、日本では当たり前であると思っていたことがカンボジアではそうではなかった。これからは、それぞれの国や人々を真に理解するためには、表面的ではなく、その国の歴史、文化、生活習慣、そして教育や医療等の現実を深く学ぶことが大切だと感じた。そのことは日本を知ることでもあると思った。



写真18 病院入口



写真19 建物入口



写真20 国際こども病院との表示



写真21 説明を聞きメモを取る



写真22 左端通訳のスキラさん



写真23 リーチャー先生と報告者

4. おわりに

今回の訪問は現地5日間ではあったが、78～80ページの表に示すとおり、実に多くの人々とのつながりがある。これは、カンボジアの子ども達の教育を支援する会の代表横山正幸先生はじめ関係者の尽力によりこれまでに時間をかけて丁寧に信頼関係をつくってきたことからである。そのつながりから、子ども達や小学校の先生との交流のみならず、医療機関視察をも可能となった。

折しもプノンペン大学日本語学科の学生達の運動会に参加する機会をもいただき、ここで出会った若者達は、仲間の中で自己を表現し、仲間を受け入れ、ともにこのときをしっかりと活かしているという姿をみることができた。それはまさに彼らの青春がここにあることの証であろう。私達もその姿から自分ができることを、できるところで、つながる人々とともに精一杯取り組んでいきたいと思うのである。

5. 今後に向けて

最後に今回のカンボジア研修をとおして、感じたこと、考えたことを3点挙げておこう。

①今回の研修では、看護学部の学生、山本幸穂さん、太田茜さんが同行した。彼女達はカンボジアに行って、発展途上国の医療の現状に触れてみたい、という思いがあった。それがきっかけで、2ヶ所の医療機関を見学し、医療の原点をかいま見た。短期間の見学ではあったが、得るものは少なかつた。この体験が彼女達にとって将来有能な医療従事者となるためのきっかけとなったらよいと思う。またぜひそうなってほしいと希う。

②これまで交流してきた女性達が、大学を卒業し、社会で活躍している姿を見ることができた。彼女達は結婚し、子どもを産み育てながらも、職場復帰をめざし、さらにキャリアを積んでいこうとしている。カンボジアの発展にとってかけがえのない人材となってきている。カンボジアも首都プノンペンでは、核家族化している。子どもができ、職場復帰をする場合、子育てをどうするかが深刻な問題となってきている。彼女らが願うのは、安心して子どもを預かって、かつ年齢に相応しい教育を受けることのできる施設、Childcare and Education Center、すなわち保育園ができることである。そのための一つの条件は、幼児教育や保育に関心をもつ若者達が育つことであろう。前

述の運動会で、幼児教育に関して現在卒業論文を作成しているという日本語学科の学生チャリヤーさんに会った。こうした若者の登場は、状況が良い方向に変わりつつあることを示唆しているように思われた。

③プノンペン大学構内のカンボジア日本人材開発センターCambodia Japan Corporation Center (CJCC) の掲示板には、Japanese Universities Informationというコーナーがある。長崎活水女子大学もその掲示板を利用し、積極的に情報を発信してはどうかと思った。

参考・引用文献

- 上田広美・岡田知子編著 (2012) 「カンボジアを知るための62章」明石書店
幼い難民を考える会編 (2010) 「カンボジアこどもたちとつくる未来」毎日新聞社
前田志津子・ボイ ソムニアン (2013) 「カンボジアの子ども達の生活意識－コック・ブラック小学校の場合」活水女子大学活水論文集第56集
前田志津子・ボイ ソムニアン (2014) 「カンボジアの子ども達の生活意識についての研究－村の小学校と都会の小学校の子ども達の比較」日本生活体験学会誌第14号
外務省 (2013) 国・地域の詳細情報 (カンボジア王国より引用)
http://www.mofa.go.jp/mofaj.toko/world_school/01asia/infoC10300.html (情報取得2015/1/28)